

山上臣憶良大唐にある時、本郷を憶ひて作る歌
いざ子ども早く大和へ大伴の御津の浜松待ち恋ひぬらむ（巻一・六三）

山上憶良臣、宴を罷る歌一首
憶良らは今は罷らむ子泣くらむそを負ふ母も吾を待つらむそ（巻三・三三七）

子等を思ふ歌一首 序を并せたり
釈迦如来い、金口に正に説きたまはく、等しく衆生を思ふこと、羅睺羅の如しとのたまへり。又説きたまはく、愛は子に過ぎたりといふこと無しとのたまへり。至極の大聖すら尚し子を愛しぶる心あり。況むや世間の蒼生の、誰かは子を愛しびずあらめや。
瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして憊はゆ 何処より 来りしものそ 眼交に もとな懸りて 安眠し寝さぬ（巻五・八〇二）

反歌
銀も金も玉も何せむに勝れる玉子に及かめやも（巻五・八〇三）

家に在りて母がとり見ば慰むる心はあらまし死なば死ぬとも（巻五・八八九）
出でて行きし日を数へつつ今日今日と吾を待たすらむ父母らはも（巻五・八九〇）
一世には二遍見えぬ父母を置きてや長く吾が別れなむ（巻五・八九一）

貧窮問答の歌一首 短歌を并せたり
風雑へ 雨降る夜の 雨雑へ 雪降る夜は 術もなく 寒くしあれば 堅塩を 取りつづしるひ 糟
湯酒 うち曝るひて 咳かひ 鼻びしびしに しかとあらぬ 鬚かき撫でて 我を除きて 人は在ら
じと 誇るへど 寒くしあれば 麻衾 引き被り 布肩衣 有りのことごと 服襲へども 寒き夜す
らを 我よりも 貧しき人の 父母は 飢え寒ゆらむ 妻子どもは 吟ひ泣くらむ 此の時は 如何
にしつつか 汝が世は渡る
天地は 広しといへど 吾が為は 狭くやなりぬる 日月は 明しといへど 吾が為は 照りや給は
ぬ 人皆か 吾のみや然る わくらばに 人とはあるを 人並に 吾も作るを 綿も無き 布肩衣の
海松の如 わわけさがれる 襪褌のみ 肩にうち懸け 伏廬の 曲廬の内に 直土に藁解き敷きて
父母は 枕の方に 妻子どもは 足の方に 囲み居て 憂へ 吟ひ 竈には 火氣ふき立てず 甑には
蜘蛛の巢懸きて 飯炊く 事も忘れて 鶺鴒の 呻吟ひ居るに いとのかきて 短き物を 端截ると 云
へるが如く 楚取る 里長が声は 寢屋戸まで 来立ち呼ばひぬ 斯くばかり 術無きものか 世間
の道（巻五・八九二）

世間を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば（巻五・八九三）
山上憶良頓首謹みて上る

術も無く苦しくあれば出で走り去ななと思へど児らに障りぬ（巻五・八九九）
富人の家の児どもの着る身無み腐し棄つらむ純綿らはも（巻五・九〇〇）

山上臣憶良の、秋の野の花を詠む二首
秋の野に咲きたる花を 指折りかき数ふれば七種の花 其の一（巻八・二五三七）
萩の花尾花葛花瞿麦の花女郎花また藤袴朝顔の花 其の二（巻八・二五三八）

山上臣憶良の沈き病の時の歌一首
士やも空しかるべき万代に語り続くべき名は立てずして（巻六・九七六）

右の一首は、山上憶良臣の沈き病の時に、藤原朝臣八束、河辺朝臣東人をして疾める状を問はしむ。ここに憶良臣、報の語已に畢り、須ありて涕を拭ひ、悲しび嘆きて、この歌を口吟ふ。